華岡青洲の「内外合一・活物窮理」

「内外合一」とは？

外科ニ志スモノハ先ズ内科ニ精通セザルベカラズ。

苟モ之を審カニシテ之ガ治方ヲ施サバ外科ニ於テ間然アルナシ。

内外ヲ審査シ始メテ刀ヲ下スベキモノナリ。

又

方ニ古今ナシ内外一理。古ニ泥ヅマバ以テ今ニ通ズベカラズ。

内ヲ略セバ以テ外ヲ治スベカラズ。蘭ヲ言フ者ハ理ニ密ニシテ而モ法ニ疎ナリ。

漢ヲ奉ズル者ハ法ニ精シクシテ而モ跡ニ泥ヅム。

故ニ我ガ術ハ治ヲ活物ニ考ヘ、法ヲ窮理ニ出スト言ウニ在リ。

又

凡ソ病ヲ療スルニハ其ノ方ヲ処シ、剤ヲ製スルニハ必ズシモ局方ニ

拘ハラズ薬餌ノ及バザル所ハ針灸コレヲ治シ針灸及バザル所ハ以テ

腹背ヲ刳割スベク、以テ腸胃ヲ湔洗スベシ。

苟モ以テ人ヲ活カスベキモノハ宣シク為サザル無カルベシ。　　とも述べている。

「活物窮理」とは？

医ハ唯活物窮理ニアリ。人身ノ道理ヲ格知シテ後疾病ヲ審ニスルニ

アラザレバ 則チ極致ニ至ルコト能ハズ。

夫レ夫々ノ道、本活物ナリ。必ズ膠柱シテ之ヲ論ズルコトナカレ。

糊塗ヲ以テ推ストキハ其理ニソムカザルモノ稀ナリ。察セズンバアルベカラズ

「内外合一・活物窮理」わずか八字で終わる簡単な語句であるが青洲の学問の帰結であり、

彼の医道哲理であり、また彼の人生観であった。

大江医家史料館には　活物窮理　の文字が**安東九華**の書で額で掲げられている